

# 『Colabo攻撃』暴走するネット社会とミンジニー

## から読み解く行政の役割

日本大学大学院危機管理学研究科教授 鈴木秀洋

文京区で性的搾取に係る人身取引事件の報道があったが、氷山の一角である。こうした性的搾取を食い止める活動をColaboは15年以上、現場でアウトリーチ手法で行ってきた。そのColaboに対する攻撃がやまない。本書の構成は、「なぜColaboが攻撃されるのか」「Colabo攻撃とは何だったのか」「少女たちの居場所を襲ったデマの影響」「攻撃を乗り越え、連帯への4部からなる。」

少女たちの居場所はなぜ狙われたのか?」 「SNSで拡散されるデマと誹謗中傷」 「女性蔑視を収益化するインフルエンサー」 「メディアの加担と沈黙」と帯にあるが、少女らの声から始まり少女らのメッセージでとりわけ認定された。名誉毀損加害者が起訴される刑事裁判も始まった。しかし、失った名誉、時間、費用、労力は回復できない。さらに「私たちは今、あまりにも壮絶で深刻な被害を受け続けている」とある。被害は現在進行形である。仁藤氏自身、自殺念慮に追い込まれる。しかし、その現実さえ「よくあの人、生きてますね」という加害者からの言葉で、商品・パ



を送ることのできる社会を創造することを目的とする団体である。公務員は、個人の尊厳を守り(憲法13条)、差別を解消し(同14条)、生存権(同25条)を保障する憲法を尊重し、擁護する義務を負う(同99条)。Colaboの掲げる目的は、行政が一旦目一番地で取り組むべき課題と合致する。しかし今回、行政はむしろColaboと距離をとる方向に進んだ。加害者側が巧妙であればあるほど、正義の論調で行政に多量の声をあげ、また被害者の立ち位置で発信する手法で、平等や公正を旨とする行政を混乱させ、行政による被害救済が鈍ることはよくある。DV、虐待、いじめ等様々な問題が同じ構造をとる。本書は、古典的であり現代的である人権・差別問題に関し、行政の立ち位置の再考を迫るもので、公務員にとって必読書といえる。

仁藤氏は「頑張って」や「支援」という言葉を排する。当事者であり、一緒に歩んでしよう。そして、女性の連帯のための女性人権センター創設を提言し、民間と行政との対等な立ち位置での向き合い方の問題提起をする。公権力を担う公務員は、現実を知らない(知った気持ち)で、政策を進めては、新たな被害を生む。本書をあらゆる部署の職階研修テキストとして、多面的な議論と根本的な対話を重ねてみることを勧める。

すずき・ひでひろ「特別区法務部、文京区危機管理課長、男女協働課長、子ども家庭支援センター所長等を経て、現在学部長。国、自治体で様々な公職を担う。法務博士(専門職)、保育士、防災士。著書に『虐待・DV・性差別・災害等から市民を守る社会的弱者にしない自治体法務』(第一法規)など。